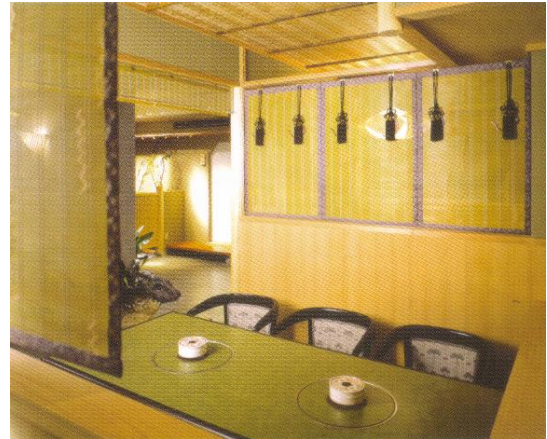


大阪金剛簾

【産地組合】大阪簾工業協同組合

（産地紹介）

簾の歴史は古く、平安時代に遡ります。宮中の間仕切りや飾りに使用された御簾（みす）が、現在のお座敷簾の原型と言われています。江戸時代初期から、良質の真竹の産地である富田林地方において、農家が竹細工を製作したことに始まります。金剛山の麓に自生する良質な竹を用いて、現在の富田林市の辺りで竹簾作りが盛んになり、産地が形成されました。



天然の竹の素材を活かした、優雅で格調高い簾は、室内の仕切りや日よけとして使われ、日本的な雰囲気のある優しい美しさを備えており、和風の暮らしの必需品となっています。夏になると多くの家は、障子を取り外し、代わりに簾を用いました。簾を通して眺める庭は、見慣れた情景ながら美しく安らぎをもたらします。

「大阪金剛簾」の伝統的な雰囲気を取り入れた簾が、現代建築の多様性を考えデザインされ、国内はもとより欧米にまで広く需要を伸ばしています。簾の高いクオリティーとその独創性は、現代の建築デザインに優れた適応性で応えます。

（トピック）

- ・ 河内長野市にある「井上スダレ株式会社」の社長である、井上智史氏が簾の歴史を将来にも残していくために、「すだれ資料館」を建設しました。井上氏は、伝統的な簾の技法や歴史を残しておかなければ、廃れてしまうと危機感を感じ、文献や復元模型、国内外での作品・製造機械など、簾に関するあらゆる資料を集めて展示されています。また、ビデオや作業体験による製作工程の紹介や、竹・ヨシなどの原材料の紹介も行っています。